

外国人日本語学習者の意見表明における合意形成について

—初対面の日本語母語話者との意見述べの会話を通して—

許 明子(名古屋大学) 肖 宇彤(名古屋大学大学院生)

1. はじめに

本研究は、初対面同士の日本語母語話者と日本語学習者が互いの意見交換を行う場面で、両者の合意形成の有無と過程、合意形成を表明する言語形式について分析することを目的とする。日本語母語話者と日本語学習者がコミュニケーションを行う際に、いつ合意が行われたのか分からない、または合意がなされないまま会話が進むことは少なくない。それが相手に対する誤解につながることもあれば、場合によっては異文化間の摩擦に発展することもある。

本研究では、初対面の日本語母語話者と外国人日本語学習者が日本事情等について日本語で意見交換を行う場面を設定し、会話調査を行った。その会話において、外国人日本語学習者はどのように自分の意見を表出するのか、相手である日本語母語話者の意見をどのように受け入れるのか、また両者の合意形成がなされるのか否かについて分析を行う。

2. 先行研究および調査概要

大浜(2000)では、日本人学生20人と外国人留学生20人を対象に、それぞれ2人1組で行った依頼場面のロールプレイ談話を分析した。ロールプレイのテーマは友人に「卒業論文のためのアンケート調査に協力してもらうよう依頼をし、調査日時と場所を決める」であった。分析をさらに具体的に見ると、分析範囲は実施のための日時場所についての相談が開始するところから合意を見るまでの相談局面であった。また、相談局面は「テーマ導入」「提案」「合意時の表現比較」の3つの部分に分けられている。大浜(2000)の分析結果から見ると、以下のことがわかった。

- ①談話者の役割意識において、日本人が役割分担の意識が高いのに対し、留学生は対話者の間に役割の違いがない
- ②提案の仕方において、日本人は非限定的提案をする傾向があるのに対し、留学生は限定的提案をする傾向がある
- ③提案に合意する際に、日本人は非明示的な表現をする傾向があるのに対し、留学生は明示的な合意表現をする

以上の大浜(2000)の分析を踏まえ、本研究では外国人日本語学習者と日本語母語話者が意見交換を行った会話データを対象に分析を行った。

調査概要は以下の表1のようになる。

表1 調査概要

	1回目	2回目
実施時間	2013年	2016年
調査対象	中国人・韓国人学習者、日本語母語話者(それぞれ6名)	中国人(C)・韓国人(K)・オランダ人(H)・日系アメリカ人学習者(U)各1名・日本語母語話者(J)2名
データ数	会話データ18ペア(2人のペアで対面式会話)	会話データ6ペア(2人のペアで対面会話)
調査内容	調査対象を2人ずつペアになしてもらい、自己紹介をお互いにしてもらい、与えたりすと話し合いでトピックを選択するか、くじ引きでテーマを決めるかを被検者間で決めて、自由に意見交換を行う。リストとくじにあるテーマは以下の7つである。 ①成人の年齢を下げるべきか否か ②就学年齢を現在の6歳から下げるべきかどうか ③消費税率を上げるべきか下げるべきか ④海外留学を必修科目として指定するべきかどうか	

⑤人は外見が大事だという意見についてどう思うか
⑥美容整形について賛成かどうか
⑦韓国の成人男性の兵役義務についてどう思うか

会話参加者は初対面同士であり、外国人同士の会話と日本語母語話者との会話の2回に分けて会話調査を行った。本研究の目的は、相談局面において合意形成がどのように行われていたかについて考察することであるため、「会話開始」から「トピック決定」までの内容を「相談局面」と定義し(大浜 2000)、その会話の部分について分析を行った。分析対象となった会話データは主に2回目の会話調査である。具体的には、「テーマ導入」「トピックの選び方の提案」「トピック決定時の合意形成」の3つの局面に分けて、合意形成がどのように表出しているかについて考察を行った。また、調査対象者の個人差があり、テーマ導入の時点が早いペアと遅いペアがあったため、本研究ではデータの「会話開始」から「トピック決定」までを相談局面として分析の対象とした。

3. 分析結果および考察

3.1 会話開始からトピック決定までの平均時間

データの平均時間は01分12秒であった。相談局面の時間を表でまとめると表2の通りである。

表2 データの相談局面の時間

	グループ	相談局面の時間	グループ	相談局面の時間
2回目 6ペア (2016)	C1 (中) -J1 (日)	01分11秒	K (韓) -J3 (日)	01分10秒
	H (オランダ) -J2 (日)	01分41秒	H (オランダ) -C1 (中)	00分56秒
	U (日系アメリカ) -C2 (中)	01分30秒	U (日系アメリカ) -J1 (日)	01分41秒

3.2 テーマ導入

相談局面のデータ導入の部分を中心に、どのような表現を用いて、誰から誰にテーマを導入したかを見た。本研究で扱ったデータを具体的にみると、テーマ導入は「どのように「トピックを選ぶ」というテーマを導入したか」を指す。また、テーマ導入時の表現について、大浜(2000)の「伺い表現」と「問いかけ表現」¹の分類を援用した。結果は表3のようになる。

表3 テーマ導入の分析結果

グループ	場面	相談局面	方向	表現
C1 (中) -J1 (日)	接	J1:「前回どれを話しました? 1回目の時」	日→外	問いかけ
K (韓) -J3 (日)	接	J3:「どうしましょうね?」	日→外	伺い
H (オランダ) -J2 (日)	接	J2:「なんか、どちらから選びたいですか?」	日→外	問いかけ
H (オランダ) -C1 (中)		H:「では、早速、トピックを見ますか?」		問いかけ
U (日系アメリカ) -C2 (中)		C2:「では、これ どちらに?」		問いかけ
U (日系アメリカ) -J1 (日)	接	U:「じゃあ、どうします?」	外→日	伺い

ここでは接触場面を中心に見ていく。まず、テーマ導入時の表現から見ると、日本語母語話者から外国人日本語学習者への会話には問いかけは2例、伺い表現は1例であった。一方、外国人日本語学習者から日本語母語話者への会話は伺い表現の1例になっている。会話の方向性から見ると、日本語母語話者からの発話が多いが、その理由として、日本語母語話者には外国人学習者への配慮があったので積極的に発話しようとしたことが考えられる。また、表現形式から見ると、問いかけ表現が3例で伺い表現より多かった。

大浜(2000)の分析では、テーマ導入の際に、日本人学生の中では伺い表現の多用が目立った。本調査の分析結果から見ると、日本語母語話者からの問いかけ表現が多かったことを一見では不自然に思う可能性があるが、外国人学習者への配慮の上、既決を前提にした質問表現をすることも配慮に一種と考えられ、その質問の選択権を外国人学習者に渡すことも考えられる。

3.3 トピックの選び方の提案

ここでいう「トピックの選び方」とは「リストからトピックを選ぶか」「くじを引いてトピックを選ぶか」のどちら

¹ 大浜(2000)によると、「伺い表現」とは未決を前提にしたものであり、「問いかけ表現」とは既決を前提にしたものである。

らを選択する局面である。本研究では分析する際、「トピックの選び方の提案」を限定的提案と非限定的提案²に分けて分析したが、結果は以下の表4の通りである。

表4 限定的提案（下線部）

グループ	場面	相談局面	方向
C1 (中) -J1 (日)	接	C1: じゃ、 <u>1から</u> (笑い) J1: 1から行きますか? C1: はい。	外→日
K (韓) -J3 (日)	接	J3: えーと、どうしましょうね? K: じゃ、 <u>くじで</u> J3: くじでやりますか? せっかくだから。(笑い)	外→日
H (オランダ) -J2 (日)	接	J2: なんか、どちらから選びたいですか? H: <u>えっじゃこのリストを見よう?</u> J2: リスト WO 見ながらやりますか?	外→日
U (日系アメリカ) -J1 (日)	接	U: えっじゃ、どうします? J1: <u>く</u> U: くじ J1: <u>僕くじ、くじが</u> U: くじ? くじ J1: はい	日→外

表5 非限定的提案（下線部）

グループ	場面	相談局面	方向
C1 (中) -J1 (日)	接	J1: じゃ、どれを話します? C1: うん、あ、前回はくじしましたけど J1: そうですよ、僕もくじして、前回 C1: うん J1: うん、だから、 <u>これの、くじの方が楽だったなあって</u> <u>いう</u> C1: そうですね J1: (笑い)	日→外
K (韓) -J3 (日)	接	J3: あ、どうしましょう? K: うんー J3: その順番に、 <u>まあ1からやるか、どうしようか? それ</u> <u>か、なんか話したいことありますか? これが面白そう</u> <u>ってやつ</u> K: そうですね、 <u>これはどうでしょうかね? 4番目</u>	日→外

会話の方向性から見ると、限定的提案においては外国人学習者から日本語母語話者への限定的な提案は3例あり、日本語母語話者から外国人学習者への1例より多かった。非限定的提案においては、2例とも日本語母語話者から外国人学習者への発話であった。また、表4から見ると、外国人学習者はいきなり限定的な提案をする点では大浜(2000)と一致した。表5では、日本人母語話者は一方的に非限定的提案をする傾向が見えたが、ここでは大浜(2000)と違う結果が出た。大浜(2000)によると、日本人は限定的提案をする前に非限定的提案を重ねる傾向があると述べられているが、その理由として、例えば日本人がいくつもの非限定的提案をしたとしても、それらが留学生に提案と理解されないことがあるのではないかとのことであった。

3.4 トピック決定時の合意形成

本研究では合意時の表現を中心に、その表現が明示的か否かを分析した。結果は以下の通りである。

² 大浜(2000)によると、「限定的提案」とは提案の内容が限定できるものであり、「非限定的提案」とは曖昧でさらなる提案で絞り込む必要があるものである。

表6 合意時の表現

グループ	場面	相談局面	表現形式
C1 (中) -J1 (日)	接	C1: じゃ, 1から (笑い) J1: 1からいきますか? C1: はい	非明示
K (韓) -J3 (日)	接	J3: くじでやりますか? せっかくだから. (笑い) K: (笑い) この後何をしたか J3: じゃ, これにします. K: 笑い	非明示
H (オランダ) -J2 (日)	接	H: これはどうでしょうかね? 4番目. J2: 国際交流... H: はい. J2: じゃそれにしましょう. H: はい.	明示
U (日系アメリカ) -J1 (日)	接	J1: うんじゃ (くじを選ぶ) 一番下にしよう, ちょっと, これ. U: えー	非明示

表6から見ると、接触場面においては合意時には非明示的な表現を用いる例が3例であった、特に の部分は日本語母語話者からの発話になり、その内容は合意を求めているものと考えられる。つまり、例えば「1からいきますか?」を聞くことにより、「わかりました、1からいきましょう。」のような表現を発話者が望んでいると推測できる。しかし、外国人学習者がその望みに応えられずに、次の段階に行ったため、日本語母語話者にとっては多少違和感を覚える可能性があるだろう分析の結果、各局面において特徴が明らかになった。

4. おわりに

以上の分析結果をまとめると以下の通りである。

まず「テーマ導入」については、1) 日本人母語話者からの問いかけは学習者より多かった、2) 日本語学習者と比べると日本人母語話者の会話では交替不可・日本語学習者では対等な関係となった、3) 伺い表現より問いかけ表現が圧倒的に多かった、ということが明らかになった。

次に、「トピックの選び方の提案」については、「限定的提案」と「非限定的提案」に分けて分析を行ったが、日本語学習者から日本人母語話者への提案には限定的提案が多く、日本人母語話者から日本語学習者への提案には非限定的提案が多かった。

最後に、「トピック決定時の合意形成」では、非明示的な合意が多く、合意形成を示す言語形式を用いていない会話データが多かった。合意形成がなされていた会話であっても、中にはお互いの発話の意図に対して異なる理解をしている例も含まれており、話し手と聞き手の合意形成の理解にずれが存在するケースもあった。

以上の分析結果から、日本語学習者と日本人母語話者の合意形成には相違点があることが明確なり、接触場面における意見交換のコミュニケーション活動に示唆が得られた。母語場面と接触場面での合意形成の特徴の相違については呉 (2016) でも指摘されているが、本研究でも同様な結果が得られた。

異文化を背景とした外国人日本語学習者と日本語母語話者の初対面同士のコミュニケーションには言語行動のパターンや表現形式の使用面等で様々な違いがあると予想される。その違いについて詳細を明らかにし、明示していくことは外国人日本語学習者に対する日本語教育や、日本人を対象とする異文化教育の現場にも応用することができる。本研究の分析結果は日本語教育や異文化教育の現場にも応用可能であると期待される。

主要参考文献

- 大浜るい子 (2000). 日本人学生と外国人留学生における合意形成過程の比較, 広島大学日本語教育学科紀要, 10, 65-71.
呉映璇 (2016). 接触場面における台湾人と日本人による合意形成談話の特徴, 人間文化創成科学論叢, 第19巻, 29-36

付記

本研究は科学研究費 (19K00707, 研究代表者: 許明子) の助成を受けている。